

「都市観察記」

「われわれの回りにあるすべてがこの本のさし絵である。挿図のかわりに現実の都市をよく見てほしい。見ている間に、あなたはまた、聞き、ぶらつき、そして見ているものについて考えるだろう。」巷では、本書は人間味のない近代都市計画に対する挑戦などと大それたことを言われているが、私は冒頭のこの一文が本書の全てであると思っている。

原書の著者、ジェイン・ジェイコブスはジャーナリストである。少なくとも都市についてのアカデミックな教育を受けた「専門家」ではない。それにも拘わらず「アメリカ大都市の死と生」は都市研究の古典として今なお多くの人に読み継がれている。ただ、それだけ原書が出版されてからの約 50 年の間に近代都市計画の「欠点」が指摘され続けたにもかかわらず、今なおその「欠点」を克服できていないということなのだろう。今となってはジェイコブスが指摘する都市の在り方は特に真新しいものではなくなっているという始末である。理論が先行し、実例が付いてこない。まるで在りし日の都市計画のようではないか。このような事態になってしまっているとすれば、おそらく多くの読者が冒頭の文を見逃しているせいであろう。“自分の住む場所を知る。”考えてみれば都市を知るためのこれほど基本的な方法はない。ジェイン・ジェイコブスであろうことか、そんな身近なところから都市論を築き上げてしまったのである。

まず本書の第 1 部では都市の特性、主に歩道の重要性について述べている。都市という不明瞭なものを理解しようとするとき、何に注目するかという点は非常に重要である。ジェイコブスは自身の観察経験から、歩道が豊かな都市はうまくいっていると結論付けた。具体的な歩道の効用として、都市に住む人々の安全を保つこと、都市において最もバラエティ豊かな出会いの場となること、子供たちにとって最も健全でのびのびとした成長の場となることの 3 つを挙げている。安全性については、①どこまでがパブリックな街路であるのかを人々が明確に共有でき②常時多くの人の目が街路に向けられ③常時ある程度の人が街路を使っている状態でこそ、街路の安全性が保たれるという。これは「言われなくても分かっている」と言われそうなほど紛う方無き理想論である。特に③については単に「街路を使え」といっても無理な相談だろう。ジェイコブス自身もそのことは自覚しているようで、しかし「バーやレストランなどのたまり場は街路に面して建てられなければならない」というだけにとどまっている。歩道の効用である残りの 2 つに必要な条件もほぼ①～③と同じである。

ただ、人のたまり場として作られたものが多数存在する都市でも、なぜうまくいくところといかないところがあるのか、という疑問に対して一つ興味深い指摘がある。それはプライベートな生活を意識する場所は人々の触れ合いや賑わいがうまくいき、逆ではうまくいかないということである。字面だけ見れば全く逆のように思えるが、ここでいうプライベートというのは「人とは異なる自分の好み」という意味である。つまり街路という抽象的な場に多様なものがあれば個人が好きなものを選べるが、始めから目的の決まった場所（ここでは公園や集会所などのことを言っている）を点在させてしまうと、かえって選択の幅が狭まってしまふ、ということだ。具体例に欠けるといふ点に目をつぶれば、おおむね納得である。

歩道という身近な生活範囲だけでなく、公園やオープンスペース、更には「近隣住区」という範囲にわた

って都市の特性を論じている。予想通りというかこれらは痛烈な批判を受けてしまっているわけであるが、前提として「うまくいっている街路」が近くに多くあればよろしい、ということらしい。批判を受ける理由はつまり、広範囲にわたって良い街路があるわけではないということであるが、ジェイコブスが最も叩いている点は、公園やオープンスペースが「都市の空地」という意味で一般化されてしまっていることである。つまり街路と同じく公園も周囲にどんな建物があるかといった要素によって性格が違うということだ。加えて公園の用途についても、ただの広い場所で終わらないための多様性を持たせるべきだと指摘している。しかし曲者ジェイコブスはここで止まらない。彼女は「都市の住民が、すべての他の利害関係と義務からみても非常にたくさんの地域の一般化された公園をにぎやかにすることは、ほとんど難しい相談だからである。」と記し、費用をかけて作られた無駄な空地がいかにか多いのかという点を主張している。都市に住む人々は見慣れてしまっているものと思うが、ジェイコブスは、陽が出ているうちに公園がガラんとした状態になってしまうことは正常ではない、と言っているのだ。

第2部では都市における「多様性」の必要を述べている。ここでいう多様性とは「行動における選択肢の多さ」と解釈してほぼ間違いないだろう。ここでは都市の多様性を成立させる条件として、「用途混在」、「小規模街区」、「古い建物」、「人口集中」の4つを挙げ、これらが揃って初めて多様性が成り立つと主張している。ジェイコブスも文中に記す通り、この4つの必要性が彼女の最も言いたかったことであるという。ジェイコブスは「現在多様性が存在する場所を観察し、なぜその多様性がその場所にあるのかという様々な経済的理由を研究することによって、都市の多様性を発見するのはそんなに難しいことではない。」と述べている。非常に恣意的な捉え方ではあるものの、多様性を生み出す要素と経済効果の高いやり方が一致すると言っている点は注目し得る。恐らくはこの部分が、彼女の推察として特筆すべき点ではないかと思う。

例えば「用途混在」についてはニューヨークの金融街における時間帯別の人口分布を例に挙げている。都会の電車がラッシュ時に暴徒的な込み具合を見せるのと同様に、ここでは昼時の1時間前後はすべての飲食店がパンク寸前になるという現象を説明している。当然、それ以外の時間帯（特に夕方5時以降）は店の前を通る人すらいらないといった有様であるという。つまりこのようなビジネス街においては信じられないほど多くの人々が、信じられないほど同じパターンの行動をとるというわけだ。近隣の飲食店は経営が立ち行かなくなるという話も納得できる。また、「古い建物」というのは、いわゆる博物的価値を持つ建築のことではなくて、お世辞にも価値のあるとは言えない古い建物のことを指している。早い話が、価値の低い古い建物を改修・使用する方が新築の建設費よりも安上がりなため、経済効果が高い。よって古い建物も残すべきである、と言っている。この条件に対しては徹底して経済効果という点からアプローチしている。

ここまでを踏まえてジェイコブスが、人々の賑わい・交流や多様性が必要であると言っていることは分かる。自らの生活体験・都市の観察に基づく考察だからこそその特徴ともいえるが、彼女の主張は要するに「大きすぎるものは良くない」というようにも捉えられる。同じ用途のものが「広範囲」にわたって存在すると某金融街のような弊害があるため分散させるべきであり、一度に「多く」のものを建て替えるような劇的な変化をおこすよりは古い建物もうまく使う方がよい、ということではないだろうか。つまり人がうまく生活していくためには都市の多くの要素をもっと「小さい」視点で考える必要があると、私は解釈した。ただし、

残念なことにそれらを解決するために「うまくいっていない都市」に対して建築的・経済的・社会的にどのような政策をすればいいかという点には、やはりほとんど触れられていない。

さて、本書はこの第2部まででお終いである。余談ではあるがこの訳文は日本語としては非常に読みづらい。機械翻訳のようで英語の語順のまま訳されたような印象を受ける。読後に知ったことだが、やはり原書は素晴らしいが訳書は分かりづらいという種の批判は多いようだ。訳書ではジェイコブスの良さが分からなかったが原書を読んで感銘を受けた、といった話もあるほどである。しかしおそらく原書にも欠点がある。それは説得力のあるデータがほとんどないということだ。というのも無理はないが、そもそも著者が身近で観察したことから推察していく過程が書かれているわけであって、多くの都市を網羅的に研究した結果ではないのである。つまり彼女が展開した様々な推察が本当に正しいのかどうかを理論的に実証することはできないのだ。しかし、だからこそ、ジェイコブスはそれを理解した上で「アメリカ大都市の死と生」を書いたのではないだろうか。これは、都市論の専門書などではなく、まち歩きのための入門書であると。彼女がどのようなつもりで本を書いたのかは知る由もないが、観察日記を専門書として翻訳してしまえばおかしな文章となることも無理からぬことと思う。

この書を手（あるいは手にしなくとも）、多くの人々が街路を歩き、会話を交わし、子供を見守る・・・そんな光景を、ジェイコブスは望んでいたのではないだろうか。本書を読みながら、アメリカの子供たちやバーの店長、旅行者が道を賑やかにすることを思い浮かべながらそんな風に想像する。もちろん、今となっては著者の意図など知る由もない。ただ私がこの本から唯一学んだことがあるとすれば、改めて都市を見て歩くことの重要性である。だからこそ本書を読み終えたら、原書の続きの章を探しに行くのではなく、町に出て歩き、残りは自分で考えるべきだろう。もちろん、訳者がそんなことを意図していたかどうかは知る由もない。